第八章　資本金と営業成績

一　資本金増額

(一)　諸準備金の資本組込

当社は、本支店の建物の整備に心を砕いて来たが、昭和三十一年度においては、福岡支店・日暮里工場改築、淡路町ビル増築工事などに多額の費用を要することが明らかになって来た。そのために一部を社が有する準備金の資本への組入れによって無償増資し、一部を株主から募集することをきめた。

募集にあたってその実情を、昭和三十一年九月二十日の株主総会にはかり、その賛成を得た。その要領は次の通りである。

(1)　昭和三十一年十二月一日付を以て再評価積立金の一部二、一〇〇万円を資本に組入れ、これに伴い新株式四二万株を発行する。昭和三十一年十月一日午後五時三十分現在の株主に対しその所有株式一株につき新株式〇・〇六株の割合で割当て、次の割当株数と合せて同時に無償交付する。

(2)　昭和三十一年十二月一日付を以て資本準備金の一部一、四〇〇万円を資本に組入れ、これに伴い新株式二八万株を発行する。昭和三十一年十月一日午後五時三十分現在の株主に対しその所有株式一株につき新株式〇・

○四株の割合で割当て、(1)の割当株式と合せて同時に無償交付する。

(二) 有償新株式の発行

前二項の増資は、株主優遇措置として行われたが、当社はこの時、在来株主を対象に有償株式をも発行している。それは、次のような条件であった。

昭和三十一年十月一日午後五時三十分現在の株主に対しその所有株式一株につき〇・四株の割合を以て割当て、申込期日同年十一月二十一日、払込期日同年十二月一日とする有償新株式二八〇万株（発行価格一株につき五〇円）を発行する。

以上のように資本の増額を計った結果、昭和三十二年一月三十一日に於ける資本総額は五億二、五〇〇万円となった。即ち前年度末に比し一億七、五〇〇万円増となっている。

(三) 昭和三十五年の増資

昭和三十五年三月増資を決定した。その発行条件は次のようである。

昭和三十五年四月三十日午後五時現在の株主名簿記載の株主に対し、その所有株式二株につき新株式一株の割合を以て割当て、記名式額面普通株式五二五万株を発行する。

発行価額、払込金額共に一株につき五〇円とし、申込期間は昭和三十五年六月十日から同年六月二十二日まで、払込期日は同年七月一日とする。

右の如くであるが、昭和三十五年の増資額は極めて好調に集めることができた。当社の資本額はそれによって七

億八、七五〇万円となった。新増資額は当社第二丸善ビル建設工事費に充当された。

(四) 株主配当

後述のように、景気の上下の影響は書籍を営業の中心とする当社に対して比較的軽く、決算で損のでるようなことはなく、ある程度の利益を生じていた。そこで社員に対しては国家公務員を上廻る諸給与をなすとともに、株主に対しても年一割六分の配当を行うことが出来た。左表は、毎期の純利益表である。それによると昭和三十三年に純利益は一〇%以上前年より落込んでいるがこれは鍋底景気の影響であった。

自昭和三十一年至同三十五年純利益表

年度別＼期別	前期	後期	合計
昭和三十一年度	八一、三一九、八三七円	九六、七七三、一二五円	一七八、〇九二、九六二円
昭和三十二年度	一二〇、三四二、〇六六円	九八、七六四、八七一円	二一九、一〇六、九三七円
昭和三十三年度	九四、八九六、九七六円	九三、八九〇、〇九〇円	一八八、七八七、〇六六円
昭和三十四年度	一〇六、六五三、七六一円	一二四、〇七七、四四九円	二三〇、七三一、二一〇円
昭和三十五年度	一四七、五五三、二二三円	一七八、一五五、九二一円	三二五、七〇九、一四四円

株主に対して年一割六分の配当を継続すると共に昭和三十一年に、再評価積立金ならびに資本準備金の資本金への組入れによる無償新株式を発行した。(右株式募集の際生じた一株未満の端数株式の処理によって生じた新株式

に対しては一株について金一円三四銭八厘の配当を行った。）また昭和三十二年上半期においては創業九十周年に当ったため、一株に付年二分の特別配当を付した。

二　営業成績

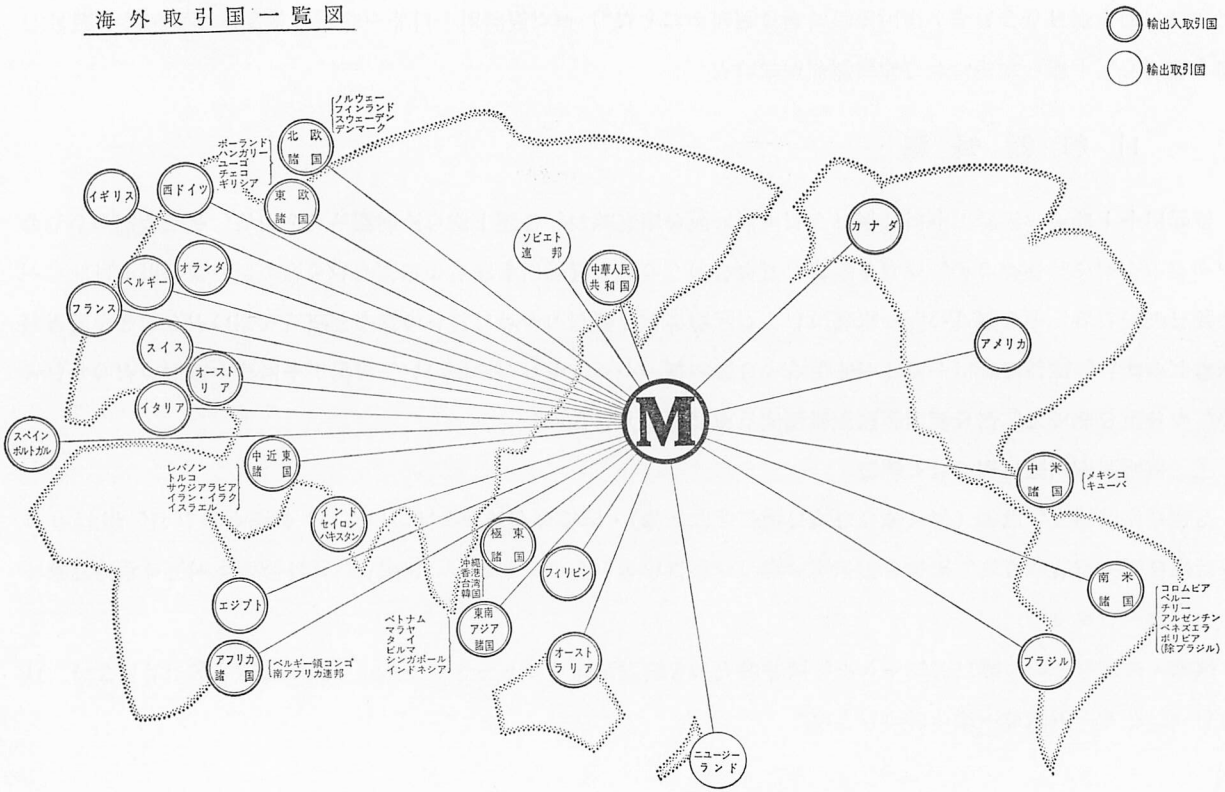
昭和三十一年から昭和三十五年末にいたる五年間の経済界は、中間一時の不況期があったが、大体好況をつづけてきたといえる。すなわち、もはや戦後ではないといわれた昭和三十年から引続いての好景気は昭和三十二年の上半期に及んだが、その頃から漸く擡頭していた国際収支の悪化とそれに対する綜合政策から生じたいわゆる鍋底景気時代を経て、再び昭和三十四年上半期からの好景気となり、それを持続して、昭和三十五年を経過したわけである。その間の歩みは、次の商品別販売実績表がそれを語っている。

(一)　商品別売上高に表われた業績

次表の書籍欄は、洋書（輸入書のほかに国内発行洋書）・和書の全体を合算している。書籍全体では、依然として洋書の売上高が多いが、和書の販売高も著しく伸びてきている。全体として見て、各年度売り上げの伸率は毎年一〇％以上である。

文具・事務機械類の欄には、インキ、万年筆などの筆記用具からタイプライター、計算機等が含まれている。ここでも、年々売上高の上昇を示している。

海外取引国一覧図


輸出入取引国
輸出取引国
M
北欧諸国
ノルウェー
フィンランド
スウェーデン
デンマーク
東欧諸国
ポーランド
ハンガリー
ユーゴ
チェコ
ギリシア
西ドイツ
イギリス
オランダ
ベルギー
フランス
スイス
オーストリア
イタリア
スペイン
ポルトガル
中近東諸国
レバノン
トルコ
サウジアラビア
イラン・イラク
イスラエル
インド
セイロン
パキスタン
エジプト
アフリカ諸国
ベルギー領コンゴ
南アフリカ連邦
ソビエト連邦
中華人民共和国
極東諸国
沖縄
香港
台湾
韓国
東南アジア諸国
ベトナム
マラヤ
タイ
ビルマ
シンガポール
インドネシア
フィリピン
オーストラリア
ニュージーランド
カナダ
アメリカ
中米諸国
メキシコ
キューバ
南米諸国
コロムビア
ペルー
チリー
アルゼンチン
ベネズエラ
ボリビア
(除ブラジル)
ブラジル

自昭和三十一年至同三十五年商品別販売実績表

（単位千円）

商品名＼年度	昭和三十一年	昭和三十二年	昭和三十三年	昭和三十四年	昭和三十五年
書籍	二、一一一、一五四	二、四一三、六一二	二、五五八、八一三	二、七九〇、四五六	三、二〇四、一三八
文具事務機械類	一、二〇六、八九〇	一、四七四、九七三	一、四三三、二〇〇	一、六五二、二七一	二、〇五四、九二六
洋品	五七七、一七六	六一九、三三六	六〇七、〇四五	六四九、〇二四	七二七、一八六
その他	一一七、八三〇	一一六、六二九	一〇六、四七六	二三三、二五二	二八二、六三三
計	四、〇一三、〇五〇	四、六二四、五五〇	四、七〇五、五三四	五、三二五、〇〇三	六、二六八、八八三

(二) 店別販売実績

店別販売実績表を見て行くと、各年度の商品販売高の消長と形影相伴の傾向にあることは言うまでもない。即ち昭和三十二年度はその後半から不景気の影響を受けて商況に伸び悩みを見せているし、昭和三十三年度においては、後半に入って前年の落ち込みを大きく取り戻している。以下昭和三十四年、三十五年と本支店を通じて好調な売れ行きを示している。

ともあれ、この五年間の売上増は毎年続いていたのである。

自昭和三十一年至三十五年店別販売実績表

（単位千円）

店名＼年度	昭和三十一年	昭和三十二年	昭和三十三年	昭和三十四年	昭和三十五年
本社	一、九八五、七四〇	二、三〇七、八六六	二、三二五、八〇六	二、六四八、五三一	三、一八八、七五八
名古屋支店	四二三、一八一	四七三、四三三	四九〇、一五三	五九六、二一七	七二一、五七六
大阪支店	三一五、一七〇	三七九、〇二一	三九一、一九一	四四三、九六〇	五二五、三四八
京都支店	二一四、八六一	二三六、九〇五	二四〇、一〇二	二八六、三一四	三二七、六八五
神戸支店	一七八、七六九	二一〇、〇六三	二一六、六二三	二三六、二九九	二六二、七四八
岡山出張所	八〇、四四二	一〇三、〇〇五	一〇九、一四〇	一一七、六七八	一三一、〇九〇
福岡支店	二九七、二四四	三三九、六五八	三六三、五六七	三八三、七三五	四〇八、四八六
仙台支店	二二五、五五二	二六四、一八三	二八六、二〇一	三一〇、九一三	三五六、八〇一
札幌支店	二五六、四九一	二七〇、六八四	二八二、七五一	三〇一、三五六	三四六、三九一
金沢出張所	三五、六〇〇	三九、七三二			
合計	四、〇一三、〇五〇	四、六二四、五五〇	四、七〇五、五三四	五、三二五、〇〇三	六、二六八、八八三